

日本の幼児教育のプロセスの質を上げる営み

無藤 隆（白梅学園大学大学院）

日本の幼児教育の要領・指針の改訂の目指すところ

- ▶ 良質な保育の実践知に学び、それを広げる。
- ▶ カリキュラムとして、資質・能力を子どもの育ちに根底に置き、さらにその実現の過程を保育の内容と組み合わせて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として表し、それらを基にカリキュラムを構築する。
- ▶ 幼児教育の実践の改善のサイクルを実践の中に位置づける。

プロセスの質を上げるために

- ▶ 資質・能力を伸ばす。
気付く（知識の基礎）、工夫する（思考力の基礎）、粘り強く取り組む（学びに向かう力、非認知スキル）。
- ▶ 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を参照して保育を改善する。
健康、人間関係、環境、言葉、表現の領域で、幼児期の終わりに資質・能力が伸びていく様子を記述する。
- ▶ 小学校に向けて、接続のカリキュラムを作り、幼児教育を小学校以降の教育の基板としていき、また小学校教育のレベルを上げる。

1歳児の学びに向かう力が、身体、人間関係、ものへの好奇心により生じる：山の何度も挑戦してよじ登る



5歳児の工夫と話し合い（気づき、工夫し、粘り強く取り組む様子）。トイを長くつなぐ工夫から何度も試みて延ばす。



5歳児が遊びのルールを守り、作る姿。「だるまさん転んだ」のルールを守る、新たな遊びを作り、（タンバリンをたたく）などのルールを入れる。



5歳児の芋の栽培における数量の感覚の育ちの姿



5歳児が泥団子を飾ってもらい、字を学ぶ姿（友だちの名前から字を探す）。



幼児教育から小学校教育への接続

- ▶ 幼児期の年長児を中心に、資質・能力の育ちと、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿などに向けての指導を強化する。
- ▶ 小学校の始まりのスタートカリキュラムでは、
 - ▶ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が発揮しやすい環境・活動を用意する。
 - ▶ 適応指導を幼児と相談し意見を聞きながら進める。
 - ▶ 教科学習の始まりは10の姿の活動の発展から始める。
 - ▶ 出身園や個人差が大きいため、その様子を見定め、対応を考える。
- ▶ 低学年の教育を生活科を中心に合科・関連的指導を増やし、体験と言葉を結びつけ、自覚的な学びへと導く。

保育実践を囲む「見直し実践」を進める

- ▶ ドキュメンテーション（観察と記録）：メモや機器を活用して簡便に記録する。
- ▶ ナラティブ・アセスメント（記述と評価）：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿などを視点として、保育者が実践の言葉で子どもの活動の具体的な様子を記述して、資質・能力の深まりについての検討に用いる。
- ▶ ダイアログ（対話と共有）：整理した記録を同僚、子ども、保護者と共有し対話し、指導計画を具体化し改善する。
- ▶ 以上がサイクルをなして、繰り返し、保育そのものと並行していく。

子どもが記録を見返す。遊びを振り返り、明日への遊びの目当てを立てる



質の改善のためのナラティブ・アプローチとエビデンスベース。

- ▶ 姿を元にしたプロセスの改善のやり方はナラティブ・アプローチと呼ぶことができる。
- ▶ 長期的には、実証的なデータにより、縦断研究や統制群との比較によるエビデンスにより、幼児教育のプロセスの質の改善の営みが子どもの発達や学習の向上をもたらすかどうか検討する必要がある。
- ▶ ナラティブ・アプローチの導入と実証研究によるエビデンス・ベースの構築の双方を並行して進めるべきであろう。

データ収集への4つのアプローチと質の改善へ

- ▶ 1) マイクロレベルの計測データによる個別的リアルタイムのアプローチの改善。
- ▶ 2) 実践知のナラティブから実践の質の改善のプロセスを構築する。
- ▶ 3) 大規模調査や長期縦断調査により、諸要因を統制して、質の要因を探り出す。
- ▶ 4) 制度的実践のあり方の検討とデータによるエビデンスの収集。

Society5.0 に向けて

- ▶ ICの導入を社会システムとして作り出す。それを幼児教育において可能にする。
- ▶ とりわけ、継続的なモニタリングと改善の仕組みを導入する。
- ▶ 多種多様な測定をリアルタイムで行い、その都度の保育の実践の判断への手がかりとする。
- ▶ 実践知を広げることと連動させていく。